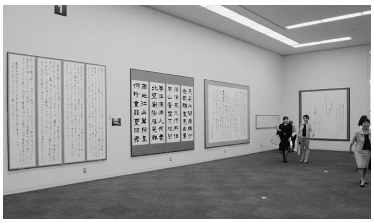
第67回 書道同文展

会期　六月二十一日～二十六日
会場　上野　東京都美術館

書道同文会第六十七回展が上野の東京都美術館に於いて盛大に開催されました。第一室には、書莚会会長、同文会名誉会長の鈴木静村先生の大作「蔵書を納める書庫」（これは平岡篤頼文庫を設計した建築家の文章を四曲に書した作品です。）心に染み入る悠然とした筆線の作品がお客様を暖かくお迎え致しました。書莚会主幹、同文会参与の髙橋香樹先生は、「文明の原動力」の力強い漢字仮名交じり書の作品、又、書莚会で御活躍の先生方の多くが四曲や扁額など見応えある作品で展覧会を盛りあげていました。今年で二年目の「同文新書」の部門は作品の数も増えバラエティーに富み「読める書」への挑戦は確実に進んでいると感じました。併催「学生展」は、半切で字句自由、小学生から大学生迄出品数一七二点あり、学生書莚で活躍されている生徒さんが、活き活きとした作品を発表し、新しい息吹きを感じ頼もしく思いました。二十一日は小暮菘華先生、北島菁丘先生、戸張丘邨先生の席上揮毫が行なわれ、作品構成や余白、リズムのお話を伺い大勢のお客様と大変有意義な時間を持つことが出来、大盛会でした。今年の受賞者は、準会員では文部科学大臣賞の吉岡麗江さん、高塚竹堂賞の吉原炳香さんをはじめ、古川菘美さん、中澤香林さん、大和田玉玲さん、会友、一般でも書莚の会員の方が多く日頃の書莚誌での精進の賜物と感じました。来年も研鑽を積み、創作技術を高めて、同文展に挑戦していきましょう。

（石田愁華）

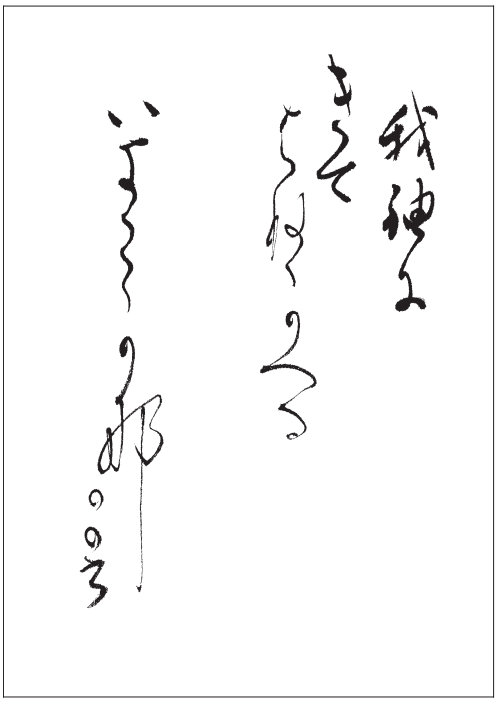


半　紙　課　題（予　告）　（十月二十二日締切）

平岡華雪先生書　林泉遠心を會す（孫健）

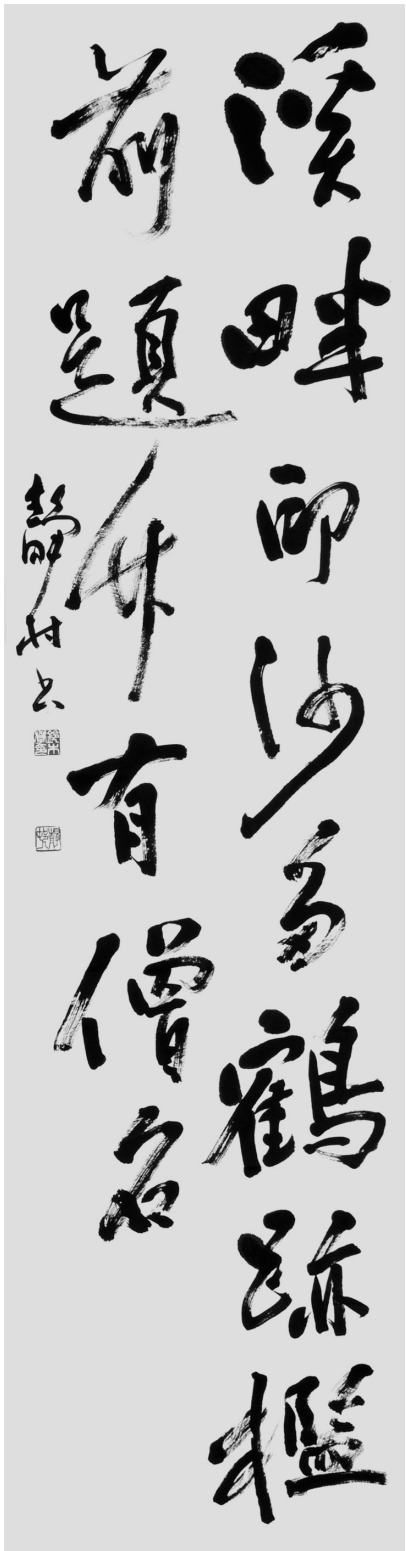
訳…山林泉石を楽しんでこそ幽遠なる心をあい会することが出来る。

平岡華雪先生書　我袖に来てはね返る螽（いなご）かな（子規）



昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A



鈴木静村書

溪畔印沙多鶴跡　檻前題竹有僧名（李山甫）

溪畔沙（すな）に印して鶴跡（かくせき）多く、檻前（かんぜん）竹に題して僧名有り。

溪　次字と共にニジミが出る位。**畔**　旁の二画目から強く縦画に入筆が大切。**印**　末画を長く払ってもよい。**沙**　旁の末画を左下に強く延ばし、斜画で余白を二分。**多**　下部の円弧はもう少し大きく。**鶴**　偏はこの書き方も多い。**跡**　やや小さく。**檻**　旁は偏より少し上げて。**前**　横画から入る筆順。**題**　末画の払いは長くゆったり。**竹**　第一画長めに。**有**　墨継ぎ。**僧**　やや左へ、〝曾〟の異体。**名**　前字同様左へ、〝口〟キリッと締める。

B

髙橋香樹主幹書

今回は少し渇筆を多めに書いてみました。渇筆は木目細かくと意識しています。木目細かい渇筆は筆に墨が充分ある状態で書くことです。墨のない筆では荒い渇筆となり美しくありません。連綿は二字連綿三ヶ所。墨継ぎは「**跡**」と「**竹**」。「**跡**」は「**蹟**」を。「**溪**」は「**谿**」も可。

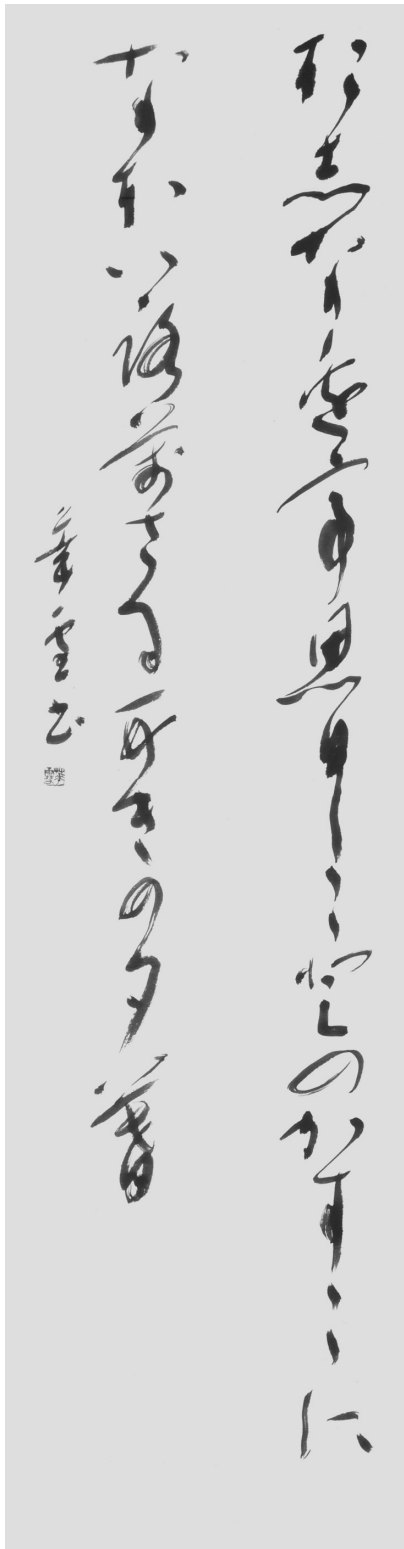
訳…渓のほとりの砂浜に鶴の足跡が多く、欄干の前の竹に詩が書いてあるが作者は僧である。

予告（十月二十二日締切）　**殘星幾點雁横塞　長笛一聲人倚樓（超嘏）**

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

A

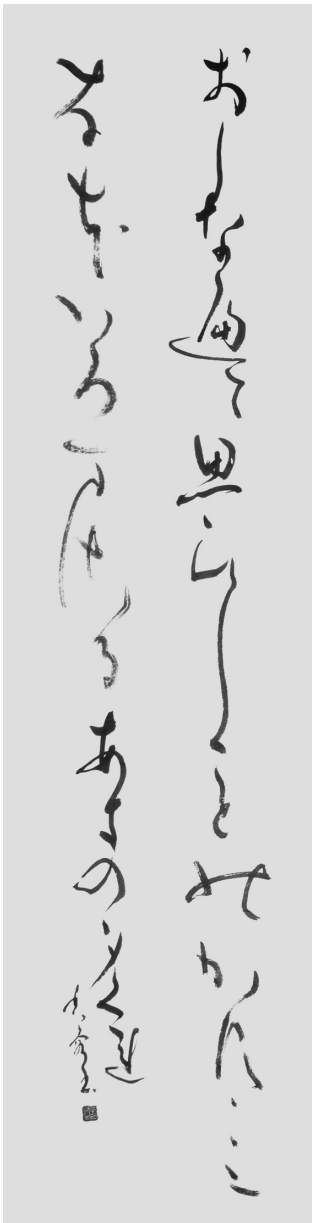


平岡華雪先生書

おしなべて思ひしことのかず〳〵になほ色まさる秋の夕暮（新古今和歌集　摂政太政大臣）

於志な邊亙思日しこ登のかす、、にな本い路萬さるあきの夕暮

B



川上香蓉先生書

おしな遍て思ひしこと能か須、、二奈本いろ万佐るあきの夕く連

摂政太政大臣　藤原良経（ふじわらのよしつね）

元久三年（一二〇六）没。三十八歳。後法性寺関白太政大臣兼実の二男。母は従三位中宮亮藤原季行女。和歌を俊成、漢詩を藤原親経に学び、定家とも主従関係にあって親しく、新古今集に実を結ぶ新風和歌を育成する土壌としての役割を果した。

和歌所寄人の筆頭で、新古今集仮名序を草した。千載集初出歌人。

学び方

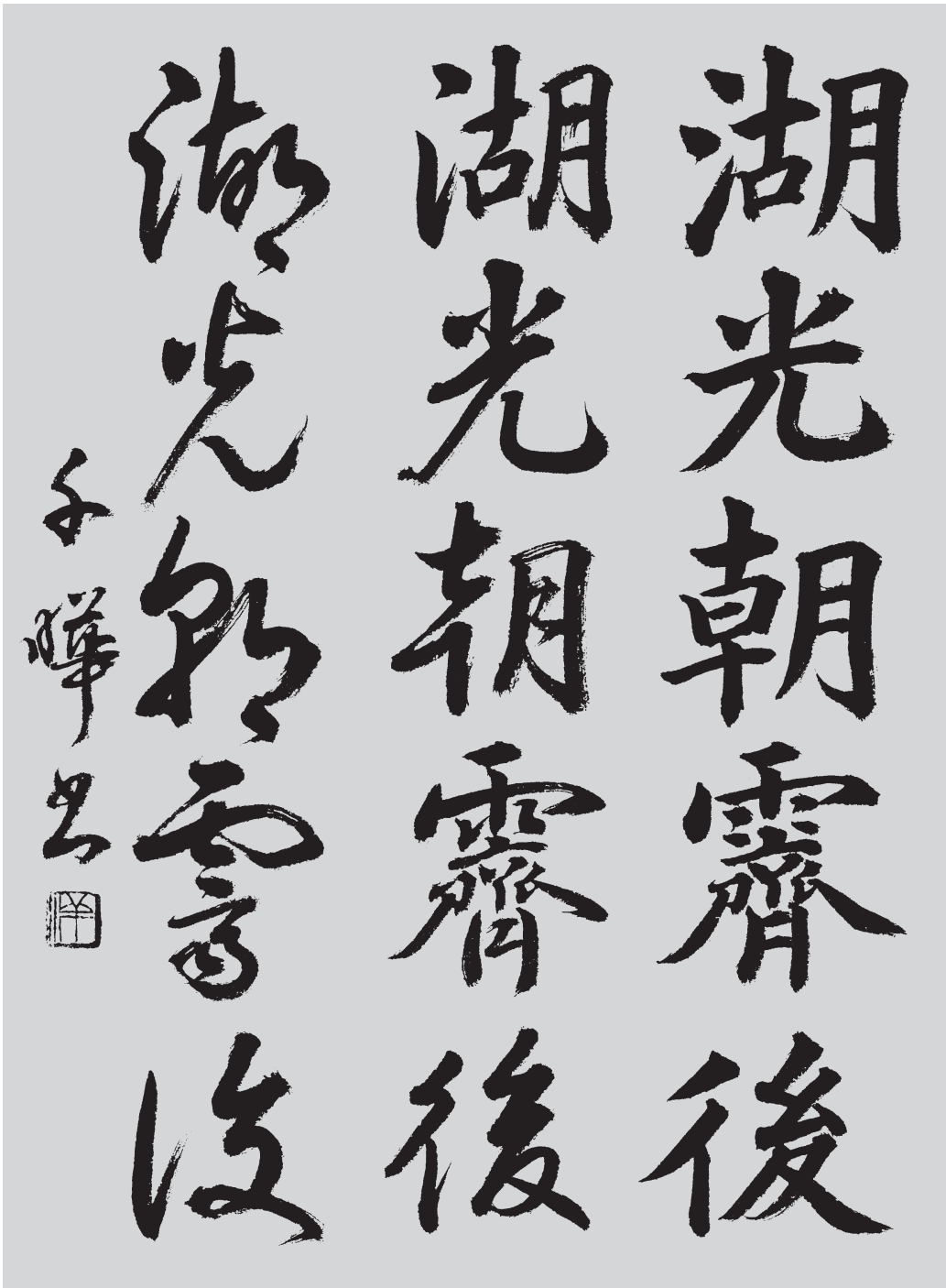
今月は昇試課題ですので新しく条幅で昇試に臨む人にも書きやすい事を心がけて書いてみました。「**おしな遍て**」はよく出て来る句ですが「**遍**」でやや左に張り出し、変化を持たせる。「**か須、、二**」の繰り返しの二点は上に出てくる「**こ**」の字と同じ調子にならないように気をつけて書く事。二行目の「**奈本いろ万佐る**」は右の行との対比を考慮し、渇筆を生かして少し大きめに。特に「**万佐**」にこの書でのポイントを持って来ました。最終句は自然な流れで静かに収めます。初めて条幅に取り組む方の参考になればと思います。また上位の方はお手本にこだわらず、仮名においての基本的な書法、左右の行の対比として墨色の変化・字の大小・潤渇等を考慮して自分らしい運筆による作品作りに取り組んで出品される事を期待します。

予告（十月二十二日締切）　**み吉野の山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり**（新古今和歌集）

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）

路川千曄先生書



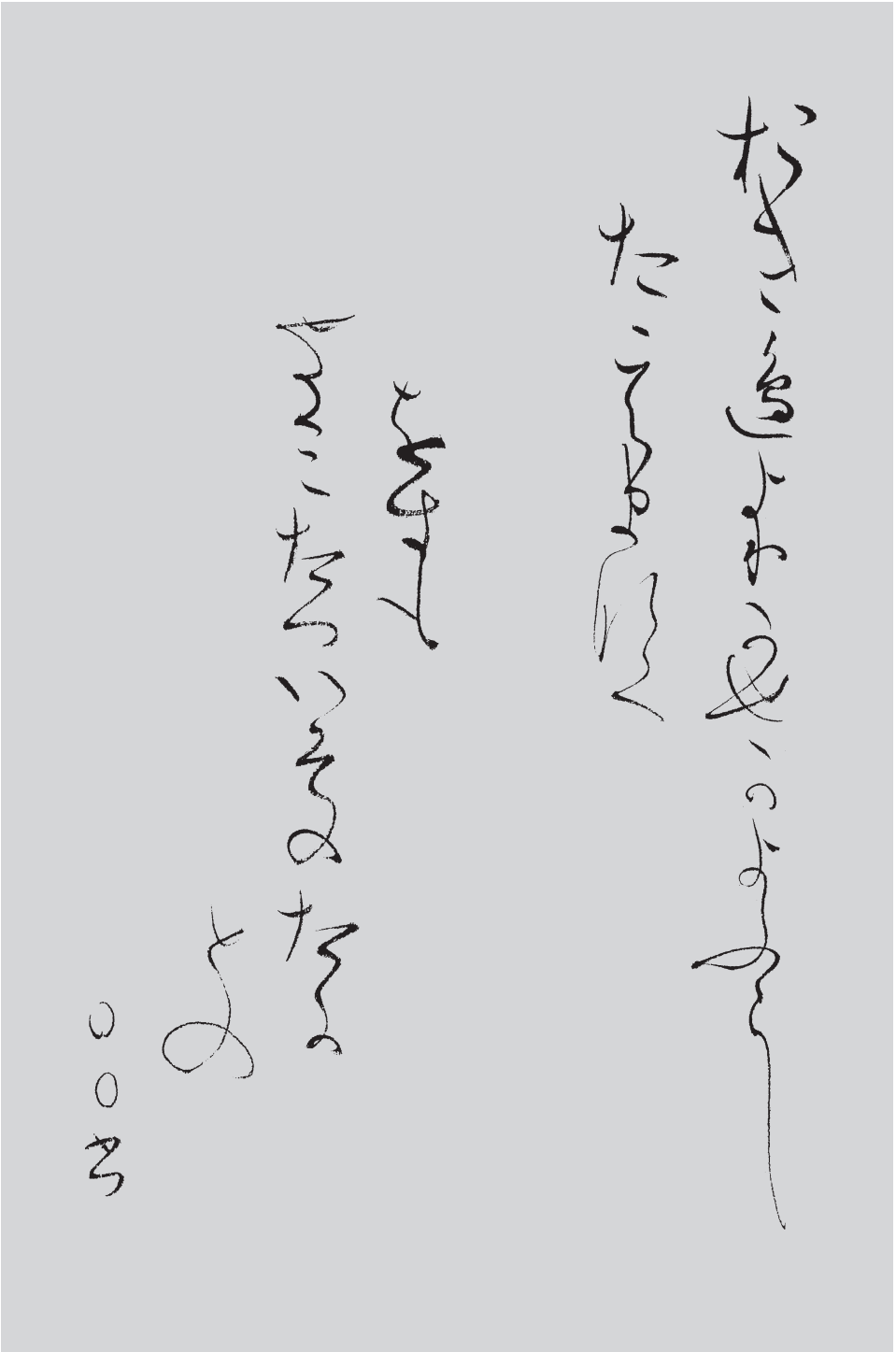
湖光朝霽後（白居易）
湖光（こうこう）は朝霽（ちょうせい）の後（のち）。

訳…雨あがりの朝の湖の光景。

◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）

高塚竹堂先生書



おきべより風かよふらしたえまなくをすも波立つ磯のたかどの

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

空庭落葉多し（陸游）

訳…ものさびた庭に落葉が多くなった。

〈同じ用筆の習熟〉

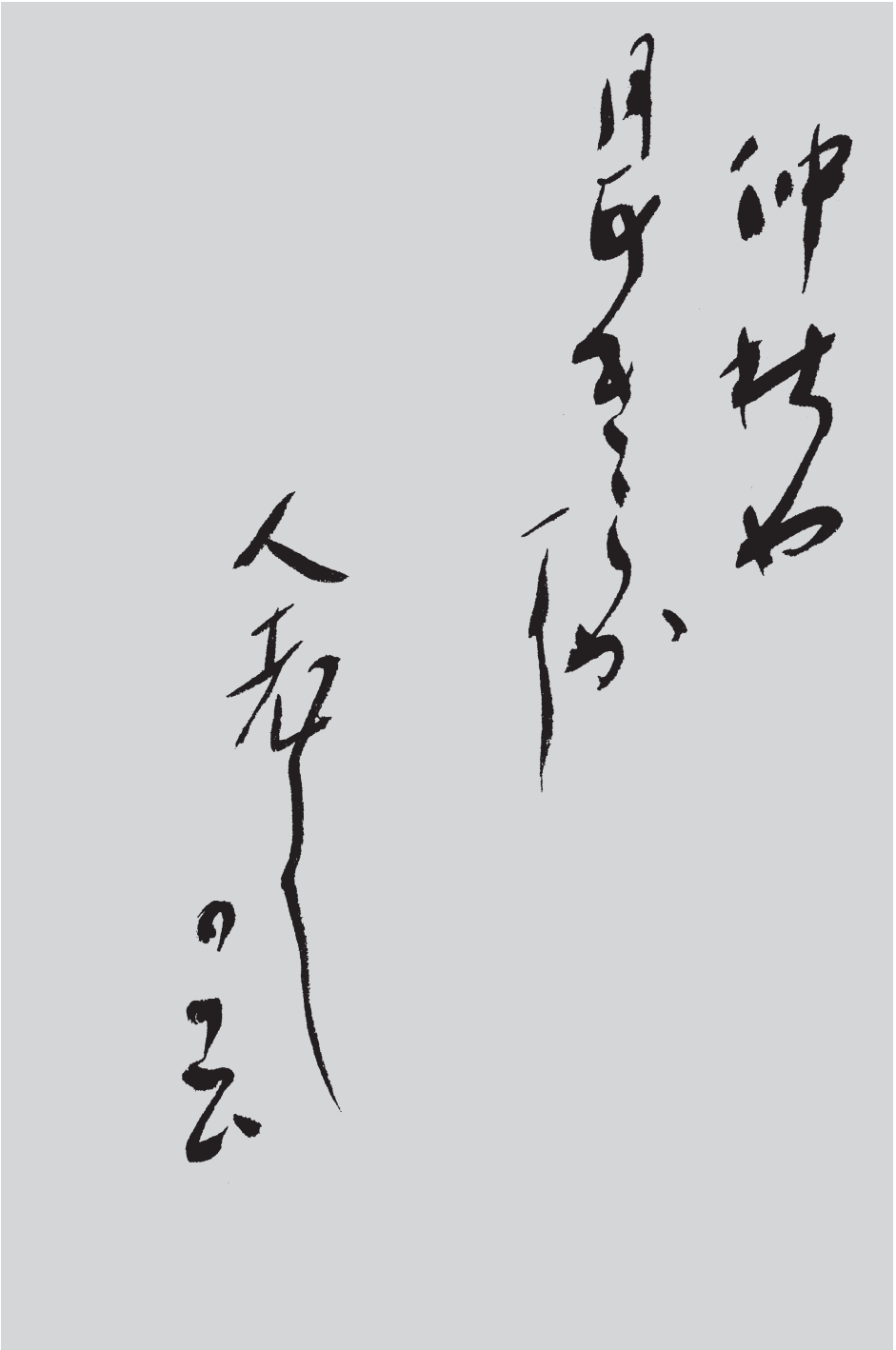
「空」「庭」の第一画（点）「多」の〝夕〟の部分、「落」「葉」の冠等の同じ用筆では、特に筆意（リズム）の習得を充分に――。練習を重ねることです。脈絡に留意されるように。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

仲秋や月明（あきらか）に人老（おい）し（虚子）

仲秋や月あきらか耳（に）人老し

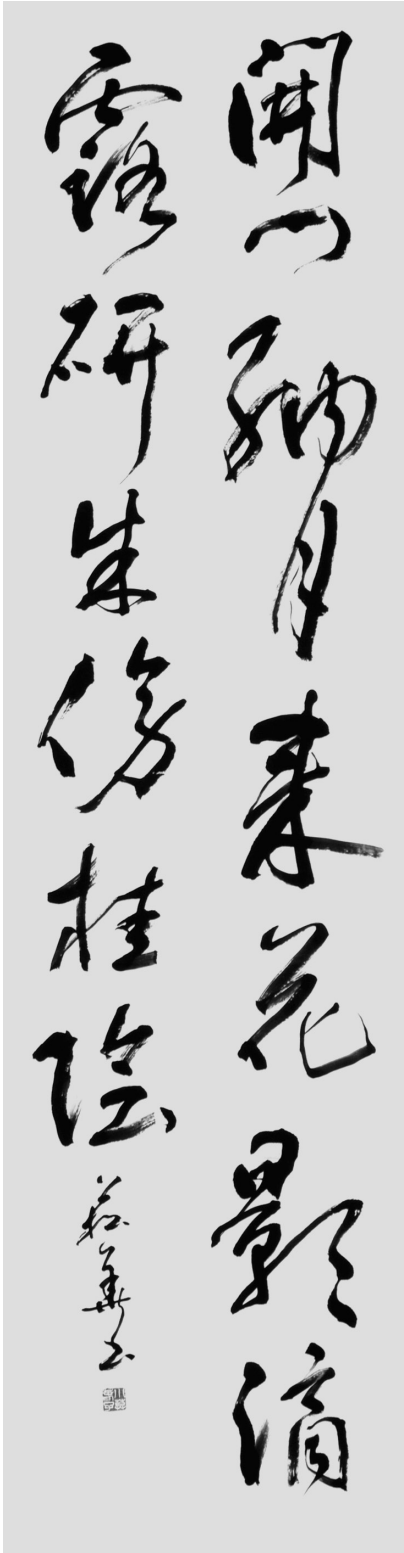


〈盛り上げと締め〉

「仲秋や」硬くならず、ゆったりと。「月あきらか耳」が主調、「あきらか」に揺れ、特に「耳」の添えがポイント、この線がすっきり書ければ成功。左群で墨、ここも落款の添えで、この作を締めるつもり…。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

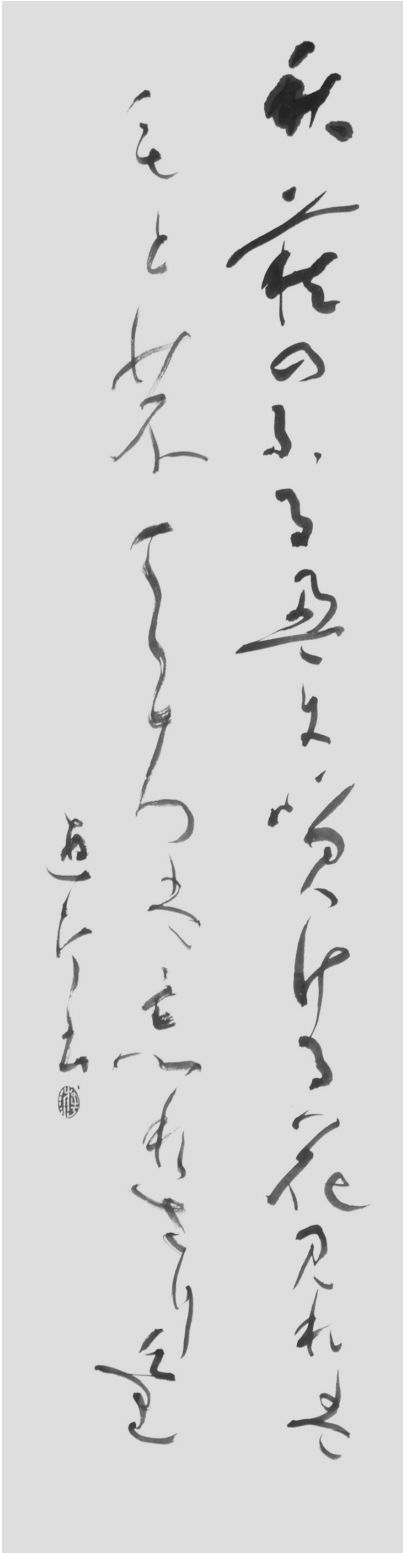
小暮菘華先生書



開門納月來花影　滴露研朱傍桂陰（李東陽）
門を開き月を納るれば花影来り、露を滴らし朱を研し桂陰に傍う。

訳…門を開けて月を引き入れれば花影が同時にうつる。露を硯に受けて朱をすってはもくせいの陰によりそう。

立川遊汀先生書



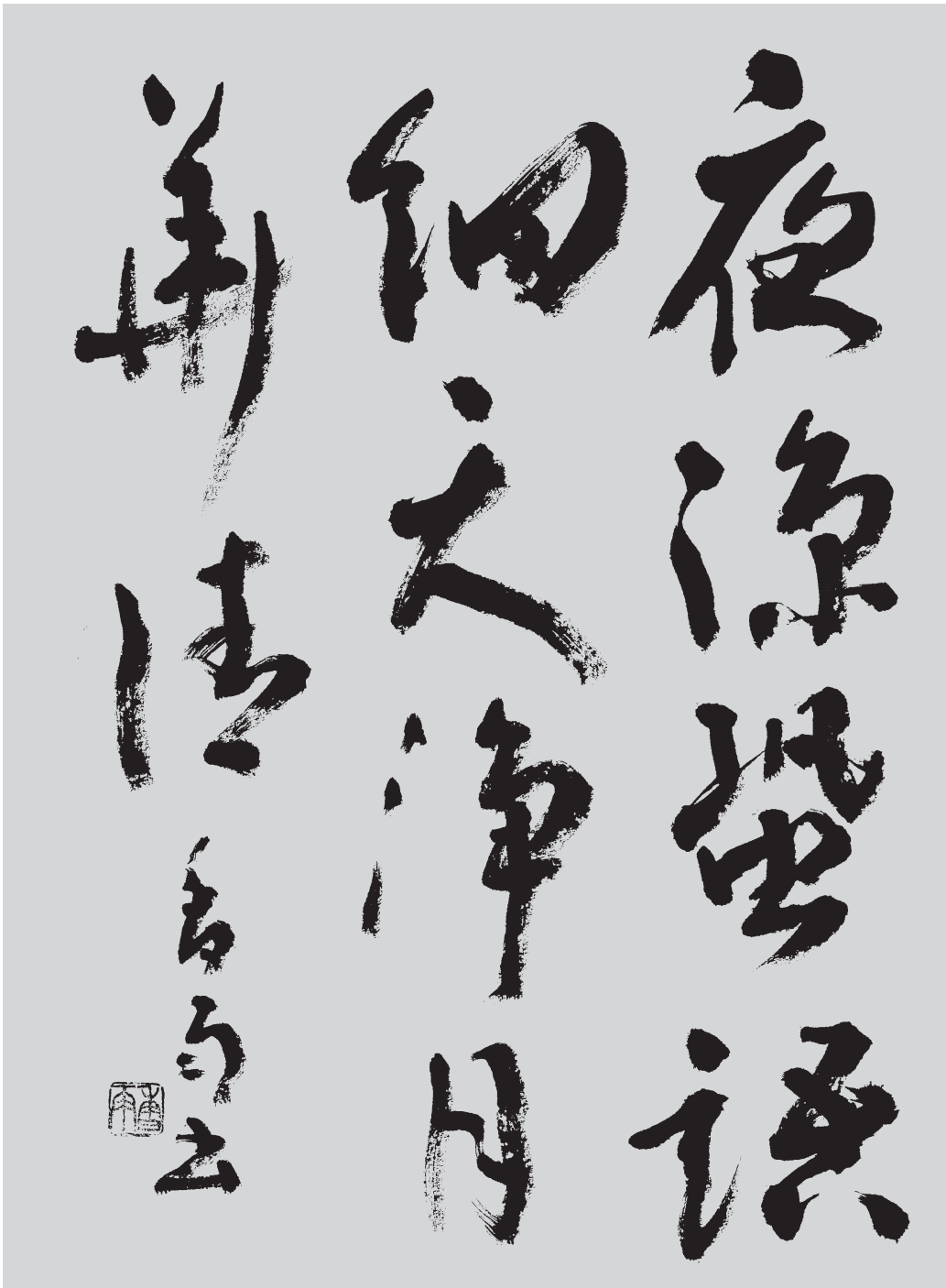
秋はぎの古枝にさける花見れば本の心はわすれざりけり（古今和歌集　躬恒）
秋萩のふる盈尓咲ける花見れ盤毛と農こゝろ盤忘れさり介里

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

酒井香雨先生書

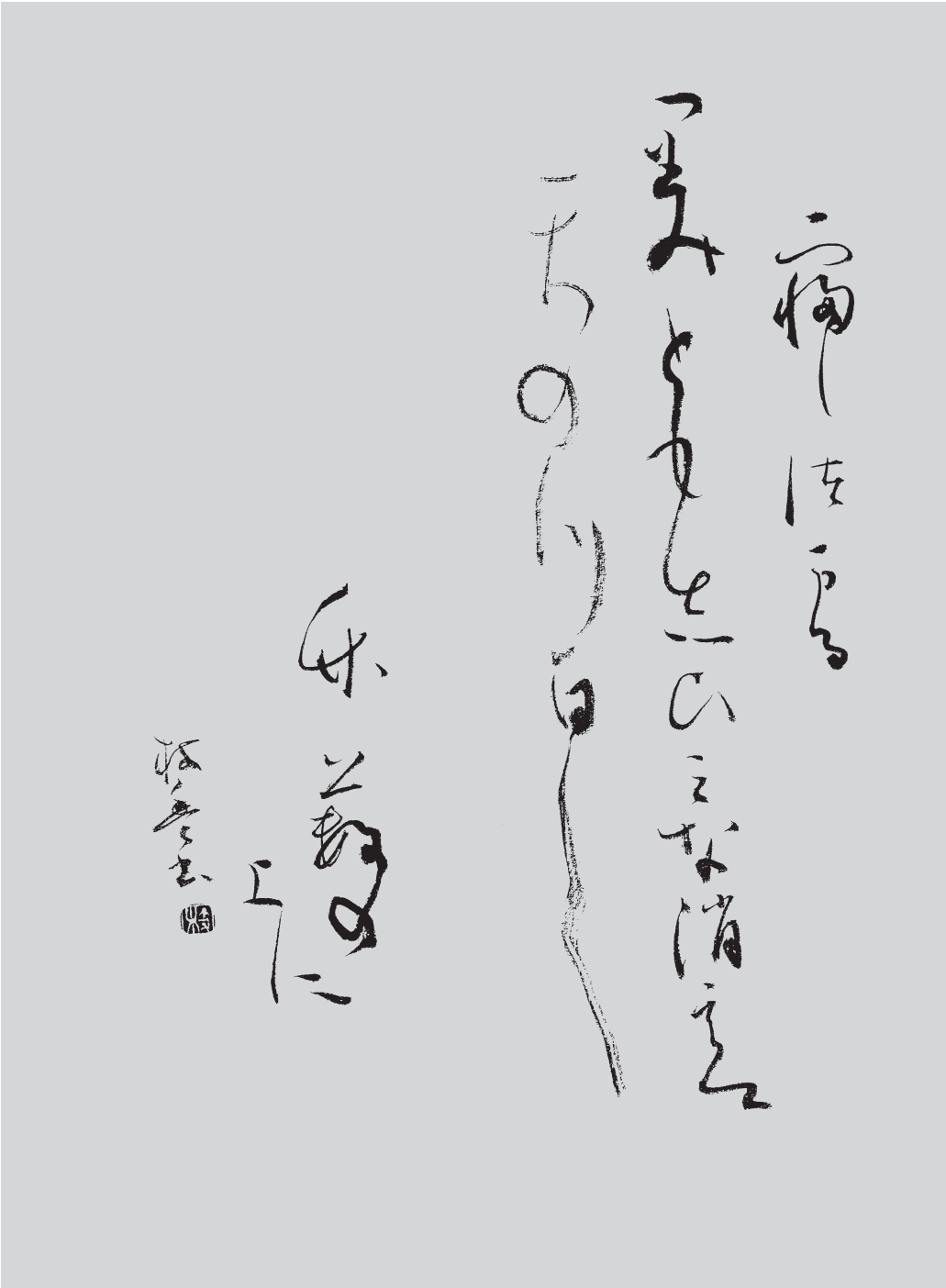
夜涼蛩語細　天淨月華清（善任）

夜涼しく蛩語細かに、天淨く月華清し。



訳…夜涼しくてこおろぎの鳴く音は細やかに、天は澄み渡って月光はさえざえしている。

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。



鈴木枝豊先生書

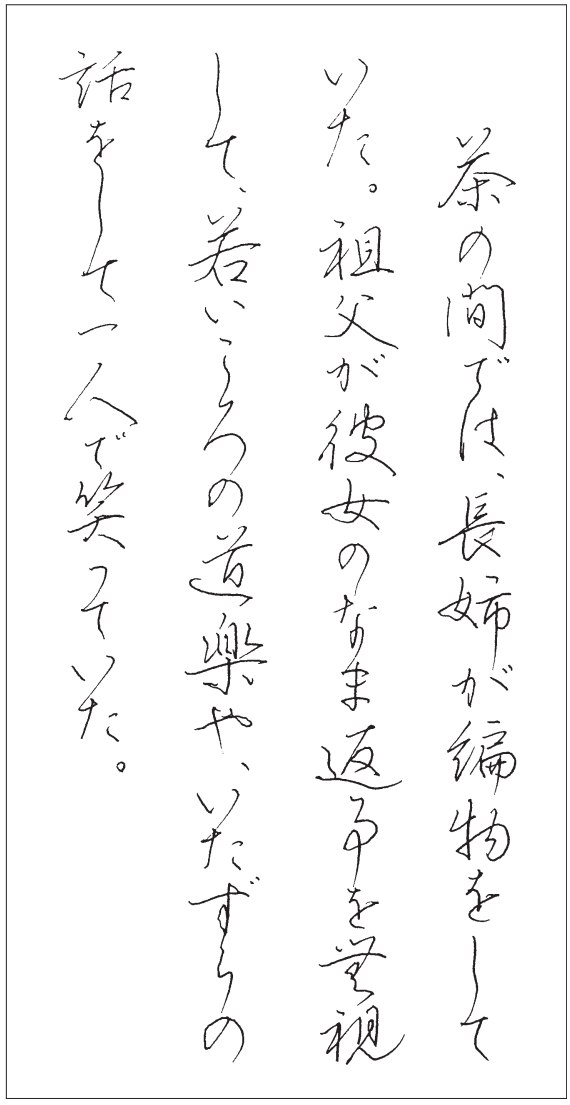
寝しづまる里のともしび皆消えて天の川白し竹藪のうへに（子規）
寝し徒万る里能とも志比三な消えて天の川白し竹藪の上に

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

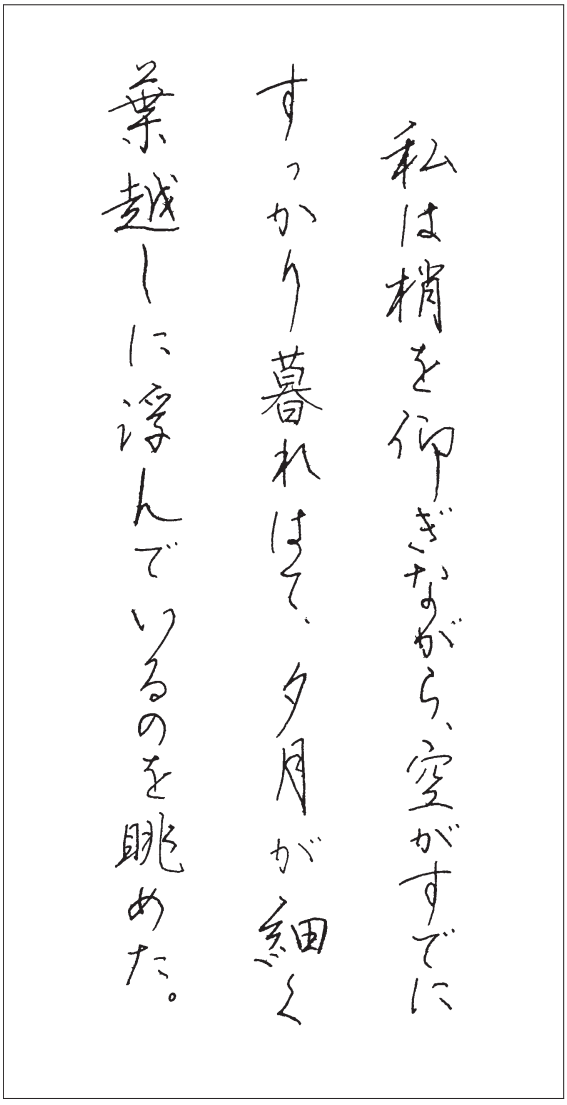
路川千曄先生書

課題1（初段以上）



湯澤春翠先生書

課題2（初段格以下）



課題1（初段以上）

茶の間では、長姉が編物をしていた。祖父が彼女のなま返事を無視して、若いころの道楽や、いたずらの話をして一人で笑っていた。

「愛のごとく」山川方夫

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。

(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。

(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新

(5) 会員は無料・会員外は四三〇円

課題2（初段格以下）

私は梢を仰ぎながら、空がすでにすっかり暮れはて、夕月が細く葉越しに浮んでいるのを眺めた。